

如是足以惑人、尤非所以爲實錄而示後人也。夫名與字者、人之所獨也、宜擇佳者、姓氏者、宗族所同也、不可得而改也。雖中國複姓、如百里、端木、石作、新垣、高堂、東方、赤草、諸葛、古野、何異於我複姓也。漢魏以來、有夷人進於中國者、猶不敢改其本姓、如鮮于、斛律、斛斯、賀蘭、賀若、宇文、耶律之類、可見矣。今我複姓雖可厭、而係乎國俗、傳自祖宗、則吾未如之何、當因其素所稱爲直、先儒有山崎闇齋、伊藤仁齋二先生、皆書複姓、其徒亦如之、予○太宰純初未知其是、且倣世之操觚者流、時單人之複姓、近日乃覺其非、遂左袒夫二先生云、

〔刊謬正俗〕姓族類

國人多複姓、或至三字四字者多、不雅馴、今或剪截書之、以混漢姓、無謂尤甚、如三耀○三善統、三理○三善統、平日已有其例、是亦非也、今且就村田氏言之、剪上字則混田中田邊、除下字則混村井村上、將何所取信也哉。中華多複姓者、白石、南宮、西野、西郷、北野、中野、薄野、坂上、古野氏、及代北、大野氏、皆著于姓譜、與國人姓氏相類、何以此爲嫌、夫姓所以分祖、而玩弄變遷、而可乎哉、

改姓雖非、而猶有說、拓跋之爲元、禿髮之爲源、革夷而從華、敬之爲文、慎之爲真、避諱而省文、尙可也、今人俗書啓狀、直用複姓、至于詞章著述、則剪截錄之、使一身有二姓者何哉、且俗書中、與卑幼、則自姓剪下一字、與尊長、則他姓截一字、以爲敬者、亦獨何哉、甚而至依倣假僞、加旁除冠、欲以類似漢姓、如長谷氏之爲張、十河氏之爲何、將欲爲留侯之裔乎、抑欲爲平叔之胄乎、可怪之甚也、

〔病間長語〕姓を脩することは、古もありと見えたり、文琳菅三など稱したるを見て知るべし、複姓もその儘に用て、見苦からぬもあれども、あまり不雅なるは、辭を脩する上からは、これも脩したきは人情なり、然ども、實錄傳記に用ゆべきにも非ず、太宰氏○名純などは、他の稱する所に拘らず、一概に、三字は三字、四字は四字にせしもきこえたることなり、姓を脩するは、あし、と云ふは、己の所見にて、他はこの脩したるが、我姓なりと云は、是非なきことなり、かほどのことは、かの